生徒向け校長通信 ～ 名言にちなんだエッセイです。

あうん

教師と生徒・保護者があうんの呼吸で教育ができることを願って‥‥

第　２５　号
令和４年９月１５日

「今から何にでもなれる」って思うと楽しくならない？ 夢はここから際限無く広がってるんじゃないのかな。

荒川弘　『銀の匙 Silver Spoon』

大自然に囲まれた大蝦夷農業高校に入学した八軒勇吾。授業が始まるなり子牛を追いかけて迷子、実習ではニワトリが肛門から生まれると知って驚愕…などなど、都会育ちには想定外の事態が多すぎて戸惑いの青春真っ最中。仲間や家畜たちに支えられたりコケにされたりしながらも日々奮闘する、酪農青春グラフィティ！！（第１巻）

（「Book」データベースから転載）

恥ずかしい話なのだが、僕は十勝に赴任するまで（20 代半ばまで）乳牛として品種改良されたホルスタインは大人になれば乳を出すものだと思っていた。ところが他の哺乳類と同様、子が生まれて食物を口にできるまでの一定期間だけ乳が出るのであって、ホルスタインといえども出産しなければ乳は出ないのだった。僕はそこでようやく子牛用のハウスがいっぱいある理由がわかった。無知でした。

時は移り、２回目の十勝勤務でも自分の無知が判明。国語の授業で生徒にスピーチさせていた時のこと。その日のスピーチは子牛の角を切り落とす時のエピソードだった。牛の角を伸ばしたままにすると危険なので、ある程度大きくなったら、子牛はみんな角を切り落とすのだという。その時、僕の頭は思考停止。「あれ、雌牛も角って伸びるの？鹿なら角が生えるのは雄だけだよね…」思わず口にしてしまった。生徒は「牛は雄も雌も角は生えます。危険防止のために子牛のうちに角を切り落とすのですが、角を切ると血がピューと飛び出てきます。それに熱したコテをあてて血止めをするのですが、痛々しくて見ていられない気分になります。」とやさしく説明し、酪農というのは生き物の生と死に真正面から向き合う仕事なのだとまとめた。生命の重みをしっかり受け止めた素晴らしいスピーチだった。

さて、『銀の匙 Silver Spoon』の主人公である八軒勇吾は、高校受験に失敗し競争社会や威圧的な父親から逃れるように札幌から十勝の大蝦夷農業高校に入学した。そんな彼が寮生活での仲間たちとの出会いや農業高校の授業を通して様々な体験をし、次第に自分の生き方を見つけていく。

クラスメートたちが農業高校に入ってきた目的や夢がはっきりしていることに焦る勇吾に、獣医志望の相川進之介はこう言う。

「今から何にでもなれる」って思うと楽しくならない？　夢はここから際限無く広がってるんじゃないのかな。

そんなある時、ばんえいを見学した勇吾に獣医さんはこんなことを話す。

夢を持つということは、同時に現実と闘う事になるのを覚悟する事だと思うよ。

十勝を舞台に現実に向き合い成長していく勇吾と仲間たち。描かれる風景は僕たちの周りのリアルな十勝で、社会にどのように出て行こうとするのか悩む等身大の高校生の姿がそこにある。十勝の高校生である君たちにも、ぜひ『銀の匙 Silver Spoon』を読んでみてほしい。我らが三条高校も高校野球の場面で“五条高校”として登場しています。（本校図書館に全巻あります！子牛の角を切る詳しい話は同じく荒川弘さんの『百姓貴族２』にあります。こちらもご覧ください。）

というわけで、９月17日から帯広美術館で『銀の匙 Silver Spoon 展』が開催される。十勝の高校生は生徒手帳提示でなんと無料！そして、この展覧会での行事「ぬりえの日」では高校生ボランティアを募集している。十勝の子どもたちのために自分たちができること。これも現実に向き合う一つの方法で、こんな小さなところから世の中は変わっていくものだと思う。ぜひ、ふるって参加してほしい。

（※ボランティア募集は11月３日分は10月21日〆切、11月23日分は11月11日〆切です。詳細は教室掲示をご覧ください）